

10

October
2024

[月刊] キリスト教書評誌

本の

HON-NO-HIROBA

ひろば

ISSN 0286-7001

一般財団法人キリスト教文書センター

1957年7月17日第三種郵便物認可

2024年10月1日発行(毎月一回1日発行)第802号

出会い・本・人

「仰げば尊し」 齋藤五十三

特集シリーズこの三冊!

自死を考える——遺族が推す、この三冊!

前島常郎

◆ 本・批評と紹介

山口紀子 編 信仰生活ガイド 老いと信仰 西岡昌一郎

E・エンゲル 著 / 佐々木勝彦 訳 義認の福音 菊地 順

焼山満里子 著 主の来臨を待ち望む教会 大貫 隆

須藤英幸 著 ルター之恩恵論と「十字架の神学」 江口再起

メアリー・タムソン 著 / 中島耕二 編 / 阿曾安治 訳

タムソン宣教師夫人メアリーの日記 小檜山ルイ

マシュー・C・オギルビー 著 / 大倉一郎 訳

オンラインの神学 瀬戸英治

深谷松男 著 福音主義教会法と長老制度 澤 正幸

塩谷直也 著 月曜日の復活 大石周平

◆ 既刊案内

◆ 書店案内

ロゴセラピー

人間への限りない畏敬に基づく心理療法

エリーザベト・ルーカス著／草野智洋・池田繁子訳

8月26日

フランクルの高弟による体系的な教科書。ロゴセラピーは、人間を身体・心理・精神の三次元で捉え、とりわけ精神次元を重視する。本書は、その基礎概念を説明したのち、「生きる意味」の発見を支援する実践技法を懇切に解説。医療と心理のみならず、教師や宗教者など人と深く関わる全ての者にとって豊かな示唆に富む。

◆ A5判・定価3300円



現代エキュメニカル運動史

藤原佐和子著 ジェンダー正義の視点から読み解く

9月19日

女性按手の是非やセクシュアリティをめぐる論争を軸に、気鋭の研究者が一次資料から丹念に綴った、新たな視点に立つエキュメニズムの歴史。

◆ A5判・定価3740円

内村鑑三問答

鈴木範久著 70年にわたり内村と向き合い続け、内村研究を主導



してきた著者が、「なぜ最初の結婚は破綻したのか」「天皇をどうみたか」など、更なる解明を要する24の「謎」を取り上げ、その人格と思想に迫る。巻末に、著者が現時点で最も正確と考える年表を付す。

◆ 四六判・定価2970円

クイア神学入門

その複数の声を聴く



クリス・グリノフ著／薄井良子訳 ジェンダーやセクシュアリティの点で非規範的であることを意味する「クイア」。その基本的な諸概念を平易に解説すると同時に、クイアと向き合う多様な神学的冒険の歴史、および最前線の議論を紹介する。

◆ 四六判・定価2970円

ロゴセラピーと物語

フランクルが教える〈意味の人間学〉

勝田茅生著 (NHK「こころの時代」講師) ◆ B6 変型判・定価1760円

フランクルの創始したロゴセラピーの中心メッセージを、民話や寓話を例にとりながら分かりやすく説き明かす。著者はNHKこころの時代「ヴィクトール・フランクル」の講師 (2024年4月～9月、第3日曜日/同週土曜日放映)



一挙2点
重版出来!

ロゴセラピーのエッセンス 18の基本概念 ◆ B6 変型判・定価2090円

フランクル著／赤坂桃子訳 『夜と霧』英語版に著者自身が付けたまたとない解説。



「仰げば尊し」

齋藤五十三

自らの読書遍歴を振り返る中、小学校の担任だった風間晋平しんぺい先生を思い出した。国語教育の専門家だった先生の授業には他校の教諭による見学が頻繁にあり、「どうも有名な先生らしい」と生徒たちも次第に気づいていった。もちろん私たちには先生の研究領域（「児童言語」）が分かるはずもなかったが、文章を読み解く面白さを教えてくださった授業の事は覚えている。風間先生は教科書の枠を超えて多くの児童文学作品を紹介してくださった。先生のお気に入りの作家は椋鳩十むねとじゅうで、彼の名作「大造じいさんとガン」を読み解いた授業の記憶は今も鮮明である。先生は登場人物の心の読み解き方を教えてつつ、私たちが作品を味わい考えた内容を文章で表す所まで寄り添ってくださった。そんな先生の影響で小学生の私は様々な本との出会いを重ねていった。中学、高校、大学時代の読書には語るべき思い出がそれほど多くない事にこの度気づき、先生との出会いの意義深さを今更ながらに思い返している。その後私は神学校に

進み、専門書を中心とする現在の読書の形を身につけていく。専門書の読書には多くの実りがあるが、純粹に読書を楽しんだ経験は小学生の頃がピークだったかもしれない。先生の教えが「読み・書き・思考する」私の人生の基礎を形成していることを思う時、風間学級に机を並べたあの日の思い出がよみがえってくる。

宗教改革者カルヴァンは一四歳の彼にラテン語を教えた教師マテュラン・コルデイエに終生感謝を抱き続けた。後にカルヴァンは恩師に『テサロニケ前書註解』を献呈し、更には八二歳の老師をジュネーヴに招いてラテン語講義の依頼をしている。私が三十代の若い牧師だった頃、風間先生は残念ながら故人となった。カルヴァンには比ぶべくもないが、読書の喜びを伝えてくださった恩師への感謝を私も小さな形にしたいと願い、この場をお借りした次第である。



▼シリーズ この三冊！

自死を考える――

遺族が推す、この三冊！

前島常郎

(まえじま・つねお) クリスマス自死遺族自助グループ
ナインの会世話人

私は2009年に当時28歳の長女を自死で失った。家族は皆クリスマスチャンだが、当時の教会には自死遺族への助けを見つけられなかった。

今は自死遺族の自助グループ2つの世話人として活動するようになり、役立つ書籍を常に探している。おすすめの本を3冊に絞るのは容易ではないが、やってみよう。

1冊目は『自死と遺族とキリスト教――「断罪」から「慰め」へ、「禁止」

から「予防」へ』(土井健司編 新教

出版社 2015年6月)。自死とい

う社会問題の研究者、予防活動をする牧師、葬儀社、遺族のケアをしている方、歴史神学的に掘り起こす方など、9名の話がまとめられている。

まず目を引くのは、第1部1「生きる価値の揺らぎに寄り添う援助者として」だ。著者の引土^{ひきつち}絵未^{えみ}さんは援助者、また研究者だが、自死遺族でもあり、3つの帽子をかぶっている。この章は、研究会で聴衆に語られたスピーチを原稿に起こしたものと見受けられる。話

しことばなので、その場の雰囲気まで伝わる。

「私は、一九歳のとき父を自殺で亡くしました」。聴衆が静まり返る様まで想像できる。引土さんが物心ついたときには両親は離婚していて、父親はひとりで1男1女を育てたのだが、ギャンブルとお酒に依存し、借金苦の末に自死を選んだ。詳しくは本文をお読みいただきたいが、自死遺族のわかち合いで参加者の語りを聞いているかのように。これほど生々しい体験談は聞いたことがなかった。

引土さんも初めは自分の中からどんな感情が出てくるかわからず、人前で話すことにためらいがあった。しかし、アメリカで援助者として訓練を受けてきて、「あなた自身が今まで何を抱えているのか」という苦しみを持っていて話さない」と促され、思い切って

自死遺族として溜め込んだ思いを話した。その結果、感情は怖くないという発見をした。

「自分の中で起こっている感情をきちんと自分で理解し受け止めて、それを伝える……その力を持つことで、新しい生き方を得ることが出来る」「自分自身の弱さを語るといふこと……：が強さに繋がる」。自助グループ主催者として納得できることばに出会うことができた。

第1部3 「葬儀社から見た自死の問題」では、安宅秀中あたくしひでなかさんは、葬儀には悲嘆など感情の処理、そして教育的な役割がある、遺された者が何を学び、どう活かすかを学ぶ場でもあるという。全ての葬儀にも言えるが、特に自死者の場合、このような視点で葬儀を取り行つてくださる葬儀社は、遺族の心の支えになるだろう。前夜式や葬儀の最後に、親族から激しく責められるご遺

族を目撃して、心を痛めることもあるという。やはり研究会で語られたもので、優しい語り口だ。

第3部8 「牧師の自死」で、研究者の岩野祐介さんは日本のキリスト教史上に名を残した高倉徳太郎牧師、長男の徹牧師のことも紹介する。「自死といふことをひた隠しにしたり、なかつたかのように扱つたりしてはならないし、自死によつてその人の生き方全体を否定してはならない……その全体を受け止め、思い返すことができるようになる」ことが重要だと語る。これは、牧師の自死に限つたことではない。

2冊目として紹介したいのは、『**自死遺族支援と自殺予防——キリスト教の視点から**』（平山正実・斎藤友紀雄監修 日本キリスト教団出版局 2015年3月）だ。月刊誌『信徒の友』が2012〜2013年度「シリーズ自死」を連載した。1年目のテーマ

「自死遺族支援」の中で、自死予防の専門家と自死遺族たちが書いたものが「第1章 自死遺族を支える」の11項目にまとめられた。専門家は、クリスチャン精神科医、支援者、牧師、神父などである。最後には、自死遺族の読者による匿名投書が掲載される。

高橋克樹さん（牧師）の「悲しみを受け入れる器としての教会へ」では、その告白に目を奪われた。「私が二十六歳のとき、同じ年の妻が自死をしました。今から三〇年前のことです。妻は高校生のころにうつ病を発症し、そのことが起点となってキリスト者になりました。その信仰を尊重して札幌北光教会で葬儀をしていただきました。私にとっては最初の礼拝体験が葬儀だったのです」。

高橋さんはその後受洗され、牧師になり、大学で死生学を学ばれ、今は大
学でも教えている。教会で自死が起き

たときも、当事者として遺族に向き合うことができる。自死という悲劇は悲劇だけに終わらず、さまざまな良いものを生むのだ。高橋さんの2つ目の記事の冒頭「牧師の自死は決して珍しくありません」にも驚いたが、冷静に考えてみると「牧師家族の自死は珍しくありません」とも「牧師（やその家族）が精神を病むことも珍しくはありません」とも言える。

私は本書によって、自助グループを始めた方々の苦労や、「自死遺族支援」という用語を知った。本書の監修者である斎藤友紀雄牧師をはじめ高橋克樹牧師も、自助グループ「ナインの会」の講師としてお招きした。

ちなみに本書の編集者である市川真紀さんは、よちよち歩きだったナインの会を10年前の発足時から愛情をもって見守ってくださった育ての母でもある。自死遺族の自助グループが健全に

長く活動するためには、傍らから励ましたり助言してくれる支援者・専門家が不可欠である。

3冊目は『ミッチー——隠れた贈りもの』（アイリス・ボルトン著 拙訳

エムティーエム 2013年）である。著者ボルトンさんは、米国ジョージア州アトランタでカウンセリングセンターを運営する信仰者だ。1977年、21歳の次男ミッチを拳銃自殺で失った。ボルトンさんはカウンセラーとして人を助けていたはずなのに、息子の自死に遭い、茫然自失した。

悲劇の日、訪ねてくれた多くの知人の中に、尊敬するクリスチャン精神科医のマホリックさんがいた。彼は謎のようなことばを語ったという。「この危機は乗り越えられるし、家族の絆は前よりも強まります……。息子さんの死には、贈りものが隠されています。今はまだ信じがたいかもしれませんが

……。」。ボルトンさんは、とても信じられなかった。「この痛みが贈りもの、息子が不注意にまたわがままに、地上のすべての責任を終わらせたこと……が贈りものだと！」

本書の原題は「My Son...My Son...」で、文字どおりには「我が子よ……、我が子よ……」だろうが、邦訳では『ミッチー 隠れた贈りもの』とした。「贈りもの」がキーワードだと思ったからだ。

息子を失ったボルトンさんは、しばらく仕事を休まざるを得なかった。家族さえ助けられなかった自分は、もう人のお役には立てないと。ところが思いもかけないことが起きた。「死にたい」と悩む若者からの相談や、子どもに死なれたという家族からの連絡が入り始めたのだ。大学に入り直し、自殺という社会問題について広く学んだ。そしてあるときは、娘に自死された直



『白死と遺族とキリスト教——「断罪」から「慰め」へ、「禁止」から「予防」へ』

土井健司：編
新教出版社
2015年刊
四六判 265頁
2,860円

後、寝室に引きこもっている母親に長時間付き添い、話を聞くこともあった。葬儀で説教を頼まれて引き受けたりもした。やがて地域で自死遺族の分かち合いを始めた。ボルトンさんと夫のジョンさんは、ミッチの残した贈りものを確かに見つけたのだ。
私も、今振り返ると、勝手に命を捨てた娘に腹を立て、孤独感に悩み、



『自死遺族支援と自殺予防——キリスト教の視点から』

平山正実、斎藤友紀雄：監
日本キリスト教団出版局
2015年刊
四六判 240頁
1,980円

ひよつとして自分も死ぬのではないかと恐れたこともあった。うつ症状にも陥った。しかし、自死遺族の自助グループに居場所と癒やしを見つけた。気がついたら、全国に多くの友人ができていた。マホーリック医師がボルトンさんに言った「贈りもの」は、私にも真実だった。痛みを恐れず見つめることで、神の恵みを見いだし、また同



『ミッチー——隠れた贈りもの』

アイリス・ボルトン：著
前島常郎：訳
エムティーエム
2013年刊
四六判 176頁
1,320円（現在は電子書籍のみ流通）
Kindle 価格 715円）

じょうな苦しみを持つ方々とながりが分かち合い、生きる意味を学び合える。娘を亡くした直後には、このような豊かな生き方があるなどとは思いませんかった。
ここで紹介した3冊は、私自身が助けられてきたので、多くの自死遺族に差し上げてきた。予防に役立つことはもちろん、自死遺族にこそお勧めする。

信仰をもって老いの道を進む ための最良の道案内

〈評者〉西岡昌一郎



信仰生活ガイド

老いと信仰

山口紀子編



本書は、「信仰生活ガイド」の第2シリーズとして、月刊誌『信徒の友』の記事をまとめたおし、キリスト教信仰の「入門書」「再入門書」として書籍化されたものです。

だれもが、いざれ避けて通れない事柄と向き合う時があります。読者やその家族が年を重ね、体の衰えと共に、次第に自宅での生活が困難となり、介護、入院、施設入所といった現実と直面することがあります。それは個々人によって、いろいろな形で経験され、必ずしも同様ではありません。しかし老いの現実がどうい姿で現れるのか、この本には、その具体的な事例が紹介されています。

年を重ねると共に、祈るべき人の名前が出て来なくなるということから始まり、やがては外出もままならず、今までできていたことができなくなる切なさを経験する人は少なくないでしょう。逆に、だれかの訪問を受けて祈っても

らって、新たな形での祈りの生活を経験する時があります。老いに関わる小説を紹介した記事もあります。認知症を患う妻と連れ添い、困苦に満ちた老夫婦の日常生活の悲痛な現実が描かれています。その一方で目尻や口元の皺を隠そうともせず、あるがままの自分を楽しみ、豊かな老年を生きていった米国の女優の写真集も紹介されています。いずれも、老いの具体的な現実を通して、ひたむきに生と死を受けいれる覚悟と不思議な生気を感じるができます。

一方、認知症についての理解の仕方、対し方、向き合い方についての事例が紹介されているものもあれば、高齢者施設への入所までのケーススタディや施設選びの実際もケアマネジャーによって紹介されています。介護を通して周囲の力を借りながら、「もうできない」ではなく「まだできる」こととは何かを考える必要性も教えられます。高齢

者と向き合う時には、受容と傾聴の姿勢をもって相手の言葉をゆっくり待つことが互いのコミュニケーションのため大事なことです。

この書の後半部は、葬儀と復活の希望をテーマとしてまとめられています。自分の葬儀を、残された家族たちにとり迎えてほしいのか、あらかじめ本人が「葬儀に関する遺言書」を記すことは、いわゆる「終活」のひとつです。

キリスト教葬儀の実際についても記されています。最期の看取りと臨終に際しての祈りから、一連の葬儀は始まります。昨今、パンデミックをきっかけに葬儀の簡素化や「直葬」も多くなってきましたが、それでも葬儀社を交えての葬儀の日程と段取りは必要です。キリスト教での葬儀となれば、遺族、葬儀社、そして教会の三者がそれぞれ



皆川達夫セレクション ルネサンス古楽の記譜法 白符計量記譜法入門

皆川達夫
樋口隆一 監修
宮崎晴代

長年中世音楽合唱の普及に尽力した西洋音楽史学者が、ルネサンス期の楽譜を原典で歌う上で必須の知識を、豊富な実例・譜例を交え初学者向けに解説。

B5判上製・64頁・定価3080円



信仰生活ガイド《第2期最終回配本》 苦しみの意味

柏木哲夫 編

人生に襲いくる数々の苦しみをどう考えるか。複数の執筆者が聖書や様々な実体験を紹介しながら、読者と共に「あなたの苦しみの意味」を考える。

四六判並製・128頁・定価1540円

関わることとなります。教会として葬儀式を執り行う場合、遺族の十分な理解が必要となるのは言うまでもありません。納棺、前夜式、葬送式、火葬前式、さらには納骨、記念会といった礼拝と祈りの時は、それぞれの教会や地域によつて少し違いがあるでしょうが、この本を通して、事前学習をすることができると思います。

いずれにしても、キリスト者にとって、死の眠りにつく時にも、復活の朝の光の中で目を覚ますことがゆるされるのは、信じる者たちの希望と慰めです。

『起きなさい、さゆり、よみがえりの朝だよ！』（99ページ）

（にしおか・しょういちろう）日本基督教団千葉教会牧師
（四六判・一二八頁・定価一五四〇円・日本キリスト教団出版局）

日本キリスト教団出版局

〒169-0051 東京都新宿区西早稲田2-3-18

☎03-3204-0422 ☎03-3204-0457

E-mail eigyou@bp.uccj.or.jp (価格10%税込)

<https://bp-uccj.jp>

真のエキュメニズムを目指して

〈評者〉 菊地 順

この度、佐々木勝彦氏の優れた訳によって、久しぶりに
 エーバハルト・ユンゲルの書物が出版された。『説教集4
 ——中斷』（佐藤司郎訳、二〇〇二年）が出版されてから
 ほぼ二〇年ぶりである。ユンゲルはカール・バルトが注目
 した若き神学徒としてそのキャリアを歩み始めた。その注
 目度は、ユンゲルが若き日にバルトの許を訪れ、語り合っ
 た数日後に、バルトがそれまで書き上げた『教会教義学』
 全巻をユンゲルの許に送り届けたことにもよく示されてい
 る（本訳書三四七頁、他）。その後ユンゲルは順調にキャ
 リアを重ね、チューリッヒ大学やチュービンゲン大学で教
 鞭を執るも、一九九〇年代に入るとその働きはやや精彩を
 欠き、「大きな書物は途切れて、沈黙が続いた印象」が
 あったが、それを打ち破ったのが一九九八年に出版された
 本書であった（近藤勝彦「訳者あとがき」『説教集2』――



義認の福音
 エキュメニズムを目指す神学的研究
 E.ユンゲル[†]著
 佐々木勝彦[✉]訳

福音堂

義認の福音

エキュメニズムを目指す神学的
研究

E・ユンゲル著

佐々木勝彦訳



『霊の現臨』二八五―二八六頁）。奇しくも、日本でもしば
 らくの間ユンゲルという名は人々の記憶から遠のいていた
 ように思われるが、この度の本訳書の出版は、正にそうし
 た状況を打ち破ることになるであろう。

本書は題名が示すように「義認」の教理を扱ったもので
 ある。しかも、キリストの福音の本質として義認を論じて
 いる。その背景には、ルター派とローマ・カトリック教会
 が一九九九年一〇月三十一日に「義認の教理に関する共同宣
 言」に署名する以前に、その内容が公表されたことに端を
 発する義認をめぐる論争がある。ユンゲルは、そうした両
 グループの努力を歓迎しながらも、その内容に関してはある
 失望を禁じ得ず、改めて「妥協」することなく、しかも
 エキュメニズムを目指して、「信仰のみによる、神なき者
 の義認に関する《福音主義的基本条項》」を福音の本質と

して捉え、それを神学的に究明する。というのも、その根底には、福音の本質としての義認に立つときにのみ本当の意味でのエキユメニズムが実現するとの確信があったからである。

本書は全部で六章から成り立っている。しかし、その中でもより重要なのは第三章「義認の出来事——神の義」、第四章「虚偽という罪」、第五章「義とされた罪びと——宗教改革者たちが用いた排他的不変化詞の意味」であろう。第三章では、旧約及びギリシア思想における義の概念を踏まえて新約及び宗教改革者の義の概念が明らかにされ、第四章では、罪の認識の根拠が明らかにされた上で罪と悪の関係が明らかにされ、さらに罪に支配された人間と不信仰としての罪が明らかにされる。そして第五章では、宗教改

革者たちが用いた「排他的不変化詞」である（キリストのみ）、〈恩恵のみ〉、〈言葉のみ〉、〈信仰のみ〉の四項目が扱われる。この四項目は相互に関連し合いながら義認の本質を厳密に捉え、語るものとして論じられている。そこには言葉を厳密に規定しながら事柄の本質に迫っていくユンゲルの妥協を許さない議論があり、何よりも信仰の恵みに対しての深い確信がある。

本書はユンゲルが渾身の力を込めて義認について論じたもので、深く耳を傾けるに値する書物である。また佐々木氏はすでにユンゲルの大著『世界における神秘としての神』の翻訳に着手されているようであるが、今からその出版が楽しみである。

（きくち・じゅん）聖学院大学政治経済学部特任教授
（A5判・三八六頁・定価五三九〇円・教文館）



神さまのエンドロール

住谷眞
SUMITANI Makoto



牧師、新約学者、
また歌人として
歩んできた著者が、
伝道生活
四十年を機に、
世に送る
異色多彩な講話集。

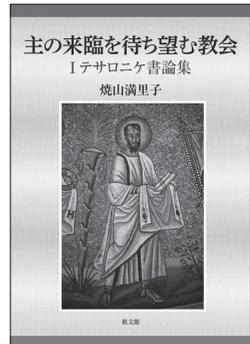
A5判・上製本
定価 7,480 [本体 6,800 + 税] 円
ISBN978-4-86325-158-8



株式会社 一麦出版社
札幌市南区北ノ沢3丁目4-10
TEL (011) 578-5888
<http://www.ichibaku.co.jp>
携帯 mobile.ichibaku.co.jp

黙示思想とパウロ

〈評者〉大貫 隆



主の来臨を待ち望む教会

Iテサロニケ書論集

烧山満里子著



本書は著者が二〇一八年以降最近までの間に発表してきたIテサロニケ書（以下Iと略記）に関する七つの論考を集成したものである。まず著者は「黙示はすべてのキリスト教神学の母」という有名な命題（E・ケーゼマン）を意識して、Iでも救いが「われらの外側で」起きた出来事であることを論証する。第1章ではI一5の「福音がなつた」の文言、第2章では現実の苦難の下での忍耐の勧告に含まれる「十字架の神学」、第3章では、「われらの外側で」宇宙大の広がりて生じているキリストの出来事への参与（ゴシックは大貫）が、内面的回心よりもパウロにとって重要であることが論じられる。

第4―7章は、現在有力な学説に逆らって、来臨についてのIとIIの見方が「終末の遅延」の状況と無関係であることを繰り返し論じる。「無秩序ではなく静かに働く勧め」

がIとIIの両方に出てくることも、切迫待望の沈静化を意図したものではなく、「一般的な〔中略〕教えである」（七九頁）。II二2の「私たちからのような手紙」が何を指すかという周知の難問については、著者は他の研究者と同様Iと同定する。ただし、Iでのパウロの真意は希望をもって今を生きることの勧めであったが、どうしたわけか「主の日はすでに来た」という意味に誤解されてしまった。IIの著者はIの後継者として、その誤解を正そうとしている（九七頁）。第6章は私（大貫）の言うイエスの「神の国」のイメージ・ネットワークをさらに広げつつ、IとIIの天使論をIエノク書の終末審判の場面から読解することを試みる。第7章は旧約預言者たちの言う「ヤハウェの日」と「主の日」が元来共同の礼拝への参加を促す呼びかけであって、終末論とは関係がないという学説を紹介する。そ

ルター神学の核心を真正面から 見事に論じた研究

〈評者〉 江口再起



ルターの恩恵論と「十字架の神学」
マルティン・ルターの神学的挑戦
須藤英幸

ルターの恩恵論と「十字架の神学」
マルティン・ルターの神学的挑戦
須藤英幸著



核心をついたルター研究である。ルターを本当に学びたいならば、繙きたい一冊。

従来、ルターと言えば、教科書風な「九五カ条」の信仰の英雄ということになりがちである。しかし、ルターの、ルターたるゆえんは、もちろんそういうことではない。

須藤氏は、ルターの核心を彼の「神学的突破」とそれに続く「十字架の神学」と見定める。つまり前期ルターである（もちろん、それは後期にも一貫していく）。

ルターの「神学的突破」とは何か（今まで塔の体験とか宗教改革的転回とか、やや曖昧に言われてきた）。須藤氏は次のように定義する。《功績による救済論から恩恵と信仰による救済論への転換》（九〇頁）。もう少し詳しく言えば《ルターの救済論は、アウグステイヌスの「恩恵的救済」を「信仰義認」の面から徹底させて、義の所在をどこ

までもキリストの側に保持させたものであり、それゆえ、それは神を求め続ける卑賤な人間が信仰を通して受けたキリストの義とその成長とによる救済論なのだと言える》（一一五頁）。つまり、《恩恵的救済の発見と信仰義認の確立》（同頁）である。ここからルターの神学、更に改革運動が展開していく。

ルターの「十字架の神学」とは何か。彼は一五一八年修道院総会で自らの十字架の神学を説明した。それが『ハイデルベルク討論』である。須藤氏はこの討論を分析し、「十字架の神学」とは、十字架の下に隠された神（キリスト！）という神認識と、その十字架のキリストに自己の生き方を重ねる倫理であるという（そして「十字架の神学」はルター義認論の一部を形成）。

「神学的突破」と「十字架の神学」。まさにルター神学の

核心である。同感。(なお私のコメントを一つ。「信仰義認」という言い方は誤解を招きやすい。神の恵みと、それへの人の応答である信仰は、滝沢克己の用語を使えば「不可分・不可同・不可逆」であるので「恩寵義認」という言い方を私はしている)。

さて、本書の意義について更に二点。第一に、パウロ↓アウグスティヌス↓ルターをつなぐ、なにはなくともまず「神の恵み」というキリスト教神学の王道を、鮮明に打ち出していること。すべては、ここから始まる。

第二点。ルターはこうした核心的論点を、ヴィットテンベルク大学での初期聖書講義(詩編、ロマ書、ヘブル書など)や、アウグスティヌス(『シンプリキアヌスへ』、『霊と文字』)研究、またドイツ神秘主義への学びを通して熟

ヨベルの新刊案内

心折れる日を越え、明日を呼び寄せる



反響

心折れる日を越え、明日を呼び寄せる あす
 手造りの再生へ向かう原葬被災地の小高おだかから 小高夏期
 新書判・二四〇頁・一四三〇円 自由大学事務局「編書」

3・11・・・小高で何が起こったのか。「あの日」からどう生きてきたのか。これからの小高はどうあり得るのか。徹底した個人の、自由人の目線で熱く、優しく、等身大で語られた「生きていくための大学」、そのオープンキャンパスを誌上で再現。多様な証言の軌跡!



しずけき祈りのなかで
 病いを授かって 高松均「著」

四六判 一九二頁・一四三〇円 高松均
 病いを授かったならば「ひと休み」こそわが身上、「足前数歩に光」を見つめながら、神のまことへの信頼を「心いつぱい、魂いつぱい」にだいて生きてきた。石、塩、振り子、分かれ道……生活のすべてが神への想念に昇華してゆく詞華集。

成させていったのだが、須藤氏はそうした形成の歩みを原典に一つ一つ丁寧に当りつつ検討していく。実に手堅い神学研究である。

最後に言及したいことは、須藤氏が、かかるルター神学が現代社会に対しても重要な意味を持っていることに触れている点である。効率主義と自己過信に満ちた現代社会の中で、我々はルターから何を学ぶべきか。須藤氏は「受動性」と「主体性」を挙げる。まず神の恵みを受容(受動)する。それが「神学的突破」の中味だ。そして、その恵みを主体的に、つまり十字架のキリストに自らを重ねつつ生きる。これが「十字架の神学」なのだ。まことに的をえた指摘だと思う。

(えぐち・さいき)ルター研究所所長
 (A5判・三〇二頁・定価四六二〇円・教文館)

ヨベル YOBEL Inc. info@yobel.co.jp
 〒113-0033 東京都文京区本郷 4-1-1-5F
 TEL03(3818)4851 FAX03(3818)4858
 出版の手引き / 呈 (税込)

来日女性宣教師が 内面を綴った貴重な資料

〈評者〉小檜山ルイ

本書は、一八七三（明治六）年に独身女性宣教師としてアメリカの長老派の婦人伝道局から日本に派遣され、五〇年以上日本で働いたメアリー・パーク（一八四一—一九二七、一八七四年、タムソン夫人となる）が残した日記のうち、一八七二年から一八七八年の部分を翻訳したものである。日記の原本はフィラデルフィアの長老派歴史協会が所蔵し、今回翻訳された部分は、同協会のホームページ上で活字化され、連載された部分に当たる。

本書は、新栄教会の創立一五〇周年の事業として実現した。同教会一四〇周年には、『タムソン書簡集』（教文館、二〇二二年）が翻訳出版されており、夫人の日記でこれを補うことで、注に詳しくあるように、新栄教会の黎明期の細部が判明する。新栄教会がこの日記の出版に情熱を持たれたことは十分理解できる。



タムソン宣教師夫人

メアリーの日記

一八七二—一八七八

メアリー・タムソン著

中島耕二編

阿曾安治訳



そうした特別な関心を持たない読者にとつて、タムソン夫人の日記の記述は、淡々とし、面白みが少ないかもしれない。その理由は、本日記が一九世紀の信仰者の「内省の記録」という性格を有しているためだと考えられる。

一七世紀のピューリタンにとつて、日記は、内省の記録として重要な意味を持ったという。一九世紀前半に名声を不動のものとした女子教育機関、マウントホリヨーク・セミナリでは、この日々の内省の習慣を毎日の「セクシヨン」（一五人から二五人の生徒からなるグループ）の集会で、規則違反を「自己申告」という形で制度化していた。タムソン夫人が学んだオハイオ州のサヴァンナ・アカデミ女子部では、マウントホリヨーク出身の二人の教員が、マウントホリヨークのやり方で指導したという。彼女はその教育を通じ、日々の内省——自己の罪深さを認知する努

力——を習慣とし、日記はそのためにあったのだろう。タムソン夫人が見ていたのは、自身の心の内だから、他者や社会に対する論評や活写があまりないのは当然なのだ。

明治のプロテスタント在日宣教師数は、女性が六〇%以上を占めた。女性宣教師の約半分は、宣教師の妻だった。近年、独身女性宣教師の研究は進んだが、宣教師の妻は相変わらず目立たない存在である。宣教師の妻は、そもそも宣教師か、といった疑問もあるだろう。

宣教師の妻は宣教師だったとここで断言しよう。そもそも、男性宣教師は、赴任直前に志を同じくする女性を見つけ、結婚し、二人揃って宣教師として按手されることが多かった。メアリのように独身女性宣教師として任地に赴き、そこで宣教師夫人となった場合は、なおさら、宣教師としての自覚は強かったろう。

任地における、彼女たちの仕事は、第一に、「ホーム」の手本を示すことだった。アメリカでは、「ホーム」は教会の次に大切なクリスチャン育成のための橋頭堡であった。「ホーム」の有り様を示すことは、重要な伝道事業の一つであり、カトリックとの違いを際立たせるものだった。

任地で「ホーム」を維持しながら、教会や学校を手伝うことは、忍耐を要する仕事である。夫や周囲の要求に合わ

せることが必要だし、伝道事業にとって必須の仕事をしているのに、表だって自己表現する機会はあまりない。

タムソン夫人の日記は、その我慢の日常が、内省による自己統制により如何に支えられたかを垣間見せてくれる、貴重な資料である。

(こひやま・るい)フェリス女学院大学学長
(四六判・二二四頁・定価二九七〇円・教文館)

新しいぶどう酒は、
新しい革袋に！

〈評者〉 瀬戸英治

オンライン教育の必要性

訳者である大倉一郎氏が本書を翻訳する動機には、訳者が牧師として所属する日本キリスト教団北海道の事情があった。北海道の教会は広大な地域に散在し、農村部の教会は教員が減少し、単独で牧師を招聘できない教会が増えている。そういう中で北海道は、信徒が「宣教主事」という肩書で牧師の働きを担う制度をスタートした。そこで課題となったのは「宣教主事」の牧会者としての基礎的神学の教育をどうするか？ということであったと聞く。都市部に暮らす神学の素養のあるものが教えるにしても、遠く離れた地方の受講者と会うこともままならない。そこで大倉氏が注目したのがオンラインによる授業であった。それに加えて、献身の思いがあっても様々な理由で神学校に行くことのできない人が、全教科の試験を受ける「Cコー



オンラインの神学

教える＋学ぶ

マシュー・C・オギルビー著

大倉一郎訳



ス」にしても、神学の学びのサポートが必要だった。大倉氏はそこにオンラインでの必要性を考え、オンライン教育の研究書を求めた。

導入はしたものの

日本での本格的オンライン教育が始まったのは、新型コロナウイルスの爆発的な感染による。ちなみに米国より30年近く遅れた。この急激なオンライン授業の導入は、オンラインの特性を生かした授業の準備ができないままでのスタートだった。やがて感染が収まってくると「真意が伝わりづらい」「議論に加わりづらい」「神学教育には向かない」などのオンライン授業への批判が大きくなったのは不幸なことだ。

このようなオンラインへの批判について、著者のオギル

ビーも MOOCs (Massive Open Online Courses) における、授業を最後までやり遂げるものは登録者の4%にすぎないことをあげ、その理由を授業が動画による配信という一方的なものとなっているからだと指摘している。(MOOCsとは、だれでもオンラインを使用し無料で自由に大学の授業が受けることができるシステム。日本の大学も参画している。)

一方通行から双方向へ

オギルビーは、一方的な知識の移転だけの授業はオンラインにせよ、オフラインにせよ、有益とならないとする。これは受講する側の問題ではなく、単なる知識の移転に終始する教える側の問題である。授業をもっと想像的で未来志向のものにする努力が求められているという。そしてこのことは、グーテンベルクの印刷術の発明から、およそ600年間続いた知識集約型の教育を超えるものだという。

オンラインの枠を超えて

オギルビーは、オンライン教育にとどまらず、一方通行の知識の伝達ではなく、教えるものと学ぶものという立場を超えて、互いに影響し合い、互いに理解していく新たな

学び方の可能性を見ている。このことは学生数の少ない日本の神学校では、必然的にそのような状況になっているが、オギルビーのいう教える側の創意工夫された授業という点、自分も含めてどこまでできているか？はなはだ疑問である。キリスト教の衰退が言われる今日、あらゆる垣根を超えた創造的議論が必要なのは誰でもわかっているはずだ。その点において、オンラインにはいまままでにない形の教育をする機会がある。新しいツールは、時として新しい世界を開くことを期待せずにはおられない。

(せと・えいじ) 農村伝道神学校特任教師

(A5判・一二二頁・定価五五〇円・ラキネット出版)

法学者である長老の証の書

〈評者〉澤 正幸



福音主義教会法と
長老制度
深谷松男著



著者がこの書を記した意図は、はしがきとあとがきに記されている。戦後まもなく受洗し、奉職した大学のある金沢の教会で、若くして長老に任じられ、爾来62年余りを「福音主義改革教会の伝統に立つ教会の長老」として仕え、歩んできた一人の法学者である真摯な信仰者として、福音主義教会にとって教会法とは何かという問題に取り組んだのがこの書である。

著者が本書の執筆目的を記す際、聖句を引用しているところに本書の性格が如実に示されていると思った。すなわち、本書は単なる法理論を論じようとするものではなく、著者が礼拝において語られる御言葉に聴従し、長老として誠実に主と教会に仕えてきた信仰の生涯の証なのである。

「主の教会は、いずこにあっても同じ信仰と秩序によって立ち続け、私たちを支える恵みと力に満たされているので

す。そう信じ、それを明らかにし、またそれを支える一助にしたいと願いつつ、本書を書き進めました」（あとがき）。

この証は今日の日本の福音主義教会すべてに向けられた、聞き流すことのできないメッセージだと思う。本来「長老制度」は歴史的なものであり、著者にとっても明治期に旧日本基督教会に連なる教会として発足した金沢教会の歴史と伝統が「福音主義教会法と長老制度」を考えるときの基礎となっている。

今日、旧日本基督教会の「改革長老教会」としての伝統を受け継ぐグループは複数の教派にまたがって、分かれて存在している。その中で、著者は日本基督教団において、著者自身その渦中に身を置いた1969年以来的の教団紛争、さらに今日の未受洗者への配餐問題に至る教会の秩序の崩壊の危機に直面するなかで、信仰の良心にかけて、誠実に、

教会の秩序とは何か、その基礎、本質について主張し、弁明を重ねるために記述してきた。それが本書のすべてではなく、それを著者は、狭い一つの教派だけのこととしてではなく、キリストの教会としての「公同性」に向けて開かれた、すべての教会を主の教会として整え、建て上げるための秩序の問題として示そうとしている。「このようにして、世界の改革長老教会は、その使命のために、歴史的諸条件の中で、上記の組織原理の具体的に妥当な実現に努めてきたのであり、日本の改革長老教会の群れも、日本基督教団においてという歴史的条件の中で、あるいは同教団以外にそれぞれの教派教会の歩みにおいて、その実現・形成をどのように図って頭なる主に仕えるかにつき、御言葉の力を信じて知恵と忍耐と祈りを尽くして励むべきことを求められているのでありましょう」（第二部「改革長老教会の伝統と教会法」92頁）。ここに著者の「改革長老教会」としての伝統を受け継ぐ諸教派への呼びかけを聞く。

「福音主義教会法と長老制度」の本質を言い表すために著者は一つの喩えを用いている。

「紙の上に砂鉄を撒く」といりろの方向を向いてバラバラであるが、その紙の下に磁石を置くと、砂鉄は磁石につきながら、また相互に結びつき、いずれも磁石の方を向いて、

磁石を中心にきれいな秩序を保って拵がる」。キリストが磁石、磁力は聖霊、見えない教会が磁場にたとえられている。砂鉄が一樣の方向を向く姿に、著者は教会の秩序を見ている。信仰告白、礼拝指針、教会組織法の三つが相互に支え合う、教会の秩序の巧みな喩えである（206頁）。

最後に筆者も著者に倣って本書をたどえるために主イエスが語られた一つの喩えをひきたいと思う。「天の国のことを学んだ学者は皆、自分の倉から新しいものと古いものを取り出す一家の主人に似ている」（マタイ13・52）。

本書は「福音主義教会法と長老制度」について、おおよそキリストの教会における秩序について、それが何であるか、また何でないか、正しい理解と誤解について、そこから学ぶべきことを取り出す倉のようなものであると。特に第一部「福音主義教会法の考え方」第1章「教会の信仰と秩序」に記された「教会法に対する誤解の根底に、教会法を近代市民的思考の枠の中だけで捉えている」ことがあるとの指摘をはじめとして、読者は教会法について明快な理解を得られるだろう。本書の出版を心から著者に感謝したい。

（さわ・まさゆき）日本キリスト教会福岡城南教会牧師
（A5判・二二四頁・定価三五二〇円・一麦出版社）

私に注がれた 「まなごし」を感じる本

〈評者〉 大石周平



月曜日の復活

「説教」終えて日が暮れて

塩谷直也著



「説教」終えて日が暮れて、今、日曜の夜長にこの本をむさぼるように読み終えました。礼拝後、夕方まで続いた会議のなかで、「先生の説教は、長くてカタくて消化不良になる」と言われてしまった後のこと。ずきんとうずく心の奥を見透かすような、表紙帯の言葉に目が留まりました。

「説教のない世界に今、旅立とう！」

思わず覚える共感。それにいくらか後ろめたさをも感じながら、本の扉を開きます。すると早速、溜め息まじりの引用句が、今夜の自分と重なりました。

「……今日モ失敗セリ……予ハ話ガ下手ナリ……」

そう力なく書きつけられた『柏木義田日記』の引用に始まる本書は、「説教者」を鼓舞して教え、奮起させる類の書物とは違います。「伝道者」に向けた本でありながら、その職責を問うよりも、務めに押し潰されそうな者を一人

の弱い「人間」と認める等身大のまなごしが印象的です。そのため、教会のリーダーに限らず、誰が読んでも、直接心のひだに触れる言葉に出会える本です。

本書は前・後編に分けられます。前編は、各出版物に公表されていた論考集で、著者いわく「スーツを着た私の言葉」。著者が実践してこられたキャンパス伝道の指針や、教会学校での子どもとの向き合い方、コロナ禍の経験を経たの礼拝のあり方など、具体的な提言もあります。特に心に残ったのは、大人にも子どもにも「弱さ」という共通の地下水がある、という言葉です。弱さは世界の共通言語、とも。この水脈から汲み出さず、この共通言語を用いないとき、私の説教は頭ごなしになったり無駄に気負ったり、「消化」しづらくなってしまふと気づかされました。同時に、共に弱さを認め合うことから始められることに、深い

安堵を覚えました。

後編は、ほぼ書き下ろしの「飲み食いしながらの言葉」。「金曜日 of 焦燥」と題された章から始まり、「土曜日 of 憂鬱」「日曜日 of 混乱」「月曜日 of 復活」「火・水・木曜日 of 道草」に至るまで、著者自身の体験を踏まえ、失敗談さえ交えながら、日常に寄り添い語りかけてくれます。

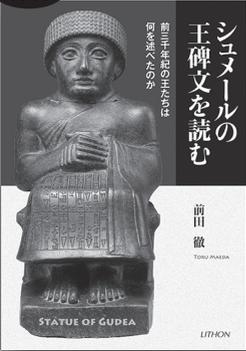
本書の印象を一言で表すなら『まなざし』を感じる本です。著者自身、先達のまなざしを意識してまとめたこと記しておられますし、信徒や教え子、愛犬とのやりとりなど、豊かな交わりの関係をも振り返っておられます。孤独な夜に本書を読むと、自分もまた、多くのまなざしに触れ、見つめ返して視野を広げられ、生かされてきたことを思い出します。この腕に抱かれた赤ちゃんから、戦争の悲惨を知

る先達、今は亡き恩師たちまで。ジェンダーの多様性・生の豊かさを教えてくれた人、敵対した相手、命を尽くして愛する姿勢を示してくれた人……。その二人または三人のまなざしが交差する場に、キリストの深いまなざしが注がれていたことを、本書は個人的な筆致をとおして、普遍的な信実として確認させてくれました。

今夜ゆっくり休んだら、この方やあの方と共に、新しくされた朝を迎えたい。日曜日に復活されたイエスにはちよつと遅れてしましますが、私にも「月曜日の復活」が備えられていると思われ、とても嬉しくなりました。

（おおいし・しゅうへい 日本キリスト教会多摩地域教会牧師／青山学院大学非常勤講師）

（四六判・一二八頁・定価一五四〇円・日本キリスト教団出版局）



新刊

シュメールの
王碑文を読む

前田 徹
MUTSU MAEDA

STATUE OF GUEBA
LITHON

シュメールの 王碑文を読む

前三千年紀の王たちは
何を述べたのか

前田 徹 [著]

- A5判上製 314頁
- 定価3,300円(税込)

今から四千年前のシュメール時代は原始社会などでなく、現代にも通じる文字を媒介とした独自の思考方法を持っており、文字による表現法が工夫されていた。王碑文をはじめ、年名や王讃歌が、どのように作られ、どのように使われたかを明らかにする。付録として、「シュメールの都市・文化・歴史」を収録し、旧約聖書の根源であるシュメール文明の一端を明らかにする。

LITHON [リトン]

〒101-0061 千代田区神田三崎町2-9-5-402
☎ 03-3238-7678 FAX 03-3238-7638

既刊案内 (2024年6月～2024年7月)

編・著・訳者	書名	判型	頁	定価(税込)	版元	発行日
B.U. シッパー著／山我哲雄訳	古代イスラエル史 ——「ミニマリズム論争」の 後で：最新の時代史	四六	194	2,310	教文館	6/19
吉見崇一編訳	ユダヤ教の祈り ——祈禱文と解説	A5	214	2,860	教文館	6/24
塩谷直也	月曜日の復活 ——「説教」終えて日が暮れて	四六	128	1,540	日本キリスト教 団出版局	6/20
山口紀子編	信仰生活ガイド 老いと信仰	四六	128	1,540	日本キリスト教 団出版局	6/25
有賀喜一	転ばぬ先のレシピ ——ヤコブが書き送った勝利 の信仰生活	四六	102	1,100	キリスト新聞社	6/20
別冊 Ministry 編集部編	別冊 Ministry 2024年6月号	B5	72	1,650	キリスト新聞社	6/21
北口沙弥香	傷によって共に生きる ——弱くてやさしい牧師の説 教集	新書	244	1,430	ヨベール	7/1
岩本遠億	聖霊は愛を完成する ——ルカの福音書説教集2	新書	200	1,320	ヨベール	7/10
鈴木範久	内村鑑三問答	四六	278	2,970	新教出版社	7/4
ヘンリ・ナウエン著／ 渡辺順子訳／ 徳田信解説	ナウエンセレクション 平和の種をまく ——祈り、抵抗、共同体	四六	192	2,420	日本キリスト教 団出版局	7/11
望月麻生	たからさがし ——神さまからの不思議なお くりもの	四六	120	1,540	日本キリスト教 団出版局	7/23
袴田康裕	改革教会の信条と展開	四六	220	2,860	教文館	7/24
水垣清著／ 金城学院大学キリスト 教文化研究所監修／ 落合建仁解説	岐阜キリスト教史 ——日本伝道覚書	A5	340	4,290	教文館	7/24
カルヴァン・ 改革派神学研究所編	改革教会の神学 2 災禍において改革された教会 ——その祈りと告白、実践の 歴史と現在	A5	274	3,960	教文館	7/24
内坂晃	講解説教 出エジプト記	A5	710	5,280	キリスト新聞社	7/26
前田徹	シメールの王碑文を読む ——前三千年紀の王たちは何 を述べたのか	A5	314	3,300	リトン	7/31

書店名	郵便番号	住所	電話	ファックス	URL	メール	郵便振替
北海道キリスト教書店	060-0807	札幌市北区北七条西6丁目	011-737-1721	011-747-5979	http://www.jb-shop.com	sasaki@jb-shop.com	02770-2-56520
善隣館書店	020-0025	盛岡市大沢川原3-2-37	019-654-1216	共用		zenrikan_system_0530@ghoo.co.jp	02350-0-874
エッセイの木	980-0012	仙台市青葉区錦町1-13-6 エマオ1F	022-223-2736	022-302-6678	https://sendaicbs.uccj.jp/	info@sendaicbs.uccj.jp	02230-0-31152
恵泉書房	260-0021	千葉市中央区新館2-1 千葉カシヤセンタービル	043-238-1224	043-247-3072	http://www.keisen.christian.jp	keisen@vestia.ocn.ne.jp	00120-9-43619
教文館	104-0061	東京都中央区銀座4-5-1	03-3561-8448	03-3563-1288	http://www.kyobunkwan.co.jp	xbooks@kyobunkwan.co.jp	00120-2-11357
待晨堂	167-0053	東京都杉並区西荻南3-16-1	03-3333-5778	共用	http://taishindo-books.jimbo.com/	taishindo@sj.com.home.ne.jp	00110-8-95827
バイブルハウス南青山	104-0061	東京都中央区銀座4-5-1	03-3567-1995	03-3567-4435	http://biblehouse.jp	biblehouse@bible.or.jp	00160-2-18410
東京キリスト教書店	112-0014	茨城県日立1-444 茨城聖パウロビル5階(休館専用)	03-3260-5663	03-3260-5637		tokyo@nikkiban.co.jp	00130-3-60976
横浜キリスト教書店	231-0063	横浜市中区花咲町3-96	045-241-3820	045-241-5881	http://www.lighter.jp/~yokohamacs/index.html	sksch@mva.biglobe.ne.jp	00250-4-2512
清光書店	951-8114	新潟市営所通一番町313	025-229-0656	共用			00560-8-51419
静岡聖文舎	420-0866	静岡市葵区西草深町20-26	054-260-6644	054-260-5612	http://www.s-seibun.co.jp/	info@s-seibun.co.jp	00810-8-26558
名古屋聖文舎	466-0045	岐阜市瑞穂区瑞穂16日本キリスト教団瑞穂会館	052-680-8090	052-680-8091	http://nagoya-seibunsha.la.coccan.jp/	nagoya-seibunsha@nifty.com	00810-5-14073
京都ヨルダン社	602-0854	京都市上京区荒神口通河原町東入ル	075-211-6675	075-211-2834	http://web.kyoto-net.or.jp/people/kjordan/	kjordan@mbox.kyoto-net.or.jp	01010-2-594
大阪キリスト教書店	530-0013	大阪市北区茶屋町2-30	06-6377-6026	06-6377-6027	http://osekacbs.web.fc2.com/	ochrbook@river.ocn.ne.jp	00990-3-43009
神戸キリスト教書店	650-0021	神戸市中央区三宮町3-9-18三陽ビル2F	078-331-7569	078-945-9388		kobex@nikkiban.co.jp	00170-2-421390
広聖文舎	730-0841	広島市中区舟入町12-7	082-208-0022	082-208-0177		hseibun0951@yahoo.co.jp	01360-4-1958
リバーサイドブックス	779-1105	徳島県阿南市羽ノ浦町古庄大道ノ西13	090-8694-4986	050-3142-3017		ykwb3@gmail.com	16220-17974891
松山キリスト教書店	790-0804	松山市中一乃町1-23	089-921-5519	089-921-5413	http://www.gojocs.jp/roshiyama_1007/index.html	sksch@dokidoki.ne.jp	01650-1-2120
新生館	810-0073	福岡市中央区舞鶴2-7-7	092-712-6123	092-781-5484	http://www.simseikan.jp/	info@simseikan.jp	01750-5-10932
キリスト教書店ハレルヤ	862-0971	熊本市大江4-20-23	096-372-3503	共用		k-haleruya@bible.or.jp	00160-2-18410
沖縄キリスト教書店	904-2143	沖縄県沖縄市知花4丁目12-33	098-927-0220	098-938-1102	https://www.okinawacbs.net	info@okinawacbs.net	01790-4-152916

※一般書店関係の方は 日キ販営業部 TEL 03-3260-5670 にご連絡ください。

福音と世界

2024年10月号

特集Ⅱ反政治

国家と権力の論理から離れて

寄稿者Ⅱ王寺賢太、飯村祥之、田崎英明

川上幸之介、栗原康、彫真悟

あるエキュメニカルな神学者の死——モルトマン追悼

(岡田仁)／好評連載 女たちの闘い——鄭淑

子さん、証言としての旧約聖書(田島卓)、一日

本的キリスト教」を読む(山口陽二)、新約釈義

ルカ福音書(山崎ランサム和彦)、他

A5判・定価660円・〒70円

定期購読についてはお気軽にご相談下さい。

新教出版社 TEL: 03-3260-6148

Email: sales@shinkyoy-pb.com

編集室から

以前当欄にて、この春カトリックの洗礼を受けたことをご報告したのだが、それに対してお一方ならずメッセージを賜った。入信後のことにもお心を寄せていただいているとのことだったので、簡単にご報告を。

最も大きな変化は日曜日ごとに礼拝(ミサ)に参加するようになったことだろう。教会が少々遠いため、近場のカトリック以外の教会にも行っている。これまでキリスト教のことを学んでいた割にあまり礼拝に与ることがなかったため戸惑うことも多かったのだが、受洗前の学びと若干の神学・教義の知識に助けられてどうやらついていけている。実際に経験してみると、言葉と典礼を通して会衆に霊を授けるこの毎週の礼拝こそが、キリスト教の誕生時から繰

予告

本のひろば

2024年11月号

本・批評と紹介

(巻頭エッセイ) 松本郁子(書評) スチュアート・バートン・ニコルズ伝編纂委員会編『スチュアート・バートン・ニコルズ伝』、鈴木範久著『内村鑑三問答』、岩本遠億著『聖霊は愛を完成する』、西谷幸介著『日本教』の弱点、B・U・シッパ著『古代イスラエル史』他

り返されてきたキリスト教の精髓なのではないかと感じる。言葉や典礼だけでなく所作や設えなどにも様々な意味があるはずで非常に興味をそそられる。小誌の冒頭の特集記事「シリーズこの三冊!」は月号編集委員が持ち回りで企画しているのだが、いつか取り上げてみたいテーマである。

(村上)

(お知らせ) 小誌「本のひろば」は一般財団法人キリスト教文書センターが発行元となっておりますが、当センターがこの度移転いたしました。裏表紙にも記載されていますが、移転先住所は〒112-0014 東京都文京区関口1-4-4 となります。電話番号等、他の情報は変わりません。お手紙等お送りいただく際は、どうぞお間違えないようお願いいたします。

これまでの歩みを振り返り、未来への歩みを始める信仰者のためのノート



未来への言葉

クリスチャン・エンディングノート

高橋貞二郎／増田 琴 監修

2024年9月24日刊行予定

信仰者にとってのエンディングノートは単なる終活のための備えではない。ノートを書く瞬間から未来に向かってどう生きるかを考えること、つまり「スターティングノート」である。それも、今までの歩みを振り返りつつ、未来に向かって歩むためのノートである。

◆B5判 並製・64頁・定価1,430円

これで、あなたもイザヤ書を読み通せる！イザヤ書通読の必携書

イザヤ書を読もう 上

ここに私がおります

大島 力

2024年9月25日刊行予定

旧約聖書を代表する書物のひとつ、イザヤ書。新約聖書にも数多く引用され、古代教会では「第五の福音書」と呼ばれた。このイザヤ書の専門家であり、熟練の説教者である著者が、イザヤ書の前半(1～39章)を、30回にわけて信徒向けに丁寧に読み解く待望の書。

◆四六判 並製・208頁・定価2,640円

関連書籍
好評発売中

『VTJ 旧約聖書注解 イザヤ書
1～12章』 大島 力 定価4,400円

イザヤ書を読もう ▲

ここに私がおります

大島 力
OSHIMA Chikara



日本キリスト教団出版局

若者と生きる教会・若者に届く説教

大嶋重徳著

「教会に若者がいない」と嘆いていませんか？
 どうすれば若者が教会に集まるのでしょうか？
 どのような説教を語れば若者に届くのでしょうか？
 信仰継承に秘訣はあるのでしょうか？



本書は、著者がキリスト者学生会(GK)の著書時代に出版し、好評を博した2冊を合本化。新たに主任牧師になってからの取り組みも加えた増補版。ユーモア満載。いつでも、誰にでも実践できるヒントがここに！
 牧師・ユースパスター・CS教師必携の書！

● 四判・並製・252頁・定価1,980円

既刊、好評発売中！

改訂新版 自由への指針

今を生きるキリスト者の倫理と十戒 大嶋重徳著

私たちが抱えるリアルな倫理的問題を信仰者としてどのように考えればよいのか？ 好評であった旧版を全面的に見直し、眉目となつてゐる倫理の課題について大幅に加筆。各章末にグループで話し合うための設問を付した。

● 四判・並製・216頁・定価2,420円



黎明期のキリスト教社会事業

近代都市形成期における挑戦と苦悩

馬淵 彰／平松英人編
 キリスト教史学会 監修



産業革命後の近代市民社会がもたらした都市問題と世俗化は、教会が実践する慈善事業・救貧事業にどのような困難を引き起こしたのか。イギリス、ドイツ、アメリカの事例を中心に、信仰の視点から歴史の実態を紐解く。

執筆：馬淵彰、平松英人、木原活信、猪刈由紀

● A5判・上製・190頁・定価3,300円

既刊、好評発売中！

マックス・ヴェーバー「倫理」論文を読み解く

キリスト教史学会編

『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』における(ヴェーバー・テーゼ)は、歴史の実証に堪えうるものなのか？ キリスト教理解は正鵠を射ているのか？ 研究者による徹底検証。

● A5判・上製・204頁・定価2,200円

ジヨージ・ミユラーとキリスト教社会福祉の源泉

木原活信著

「天助」の思想と日本への影響

19世紀イギリスで伝道し、孤児事業に献身したミユラーの生涯と功績を明らかにし、山室軍平や石井十次らへの影響を探る。

● A5判・上製・304頁・定価5,060円

9月の新刊 (価格表示は税込)

一九五七年七月一七日 第三種郵便物認可
 二〇二四年一〇月一日発行 (毎月一回一日発行)
本のひろば 第八二〇号 二〇二四年一〇月号

発行所 〒112-0014 東京都文京区関口一-四四-14 一般財団法人キリスト教文書センター
 電話〇三-3261-6520 振替〇一七〇五-12679
 発行人 金子和人 編集人 村上信児 印刷所 モリモト印刷株式会社
 発売所 日本キリスト教書販株式会社 電話〇三-3261-5670

定価七八円(税抜七二円) (¥63円)
 二年分一三〇〇円(送料共)

教文館

〒104-0061 東京都中央区銀座4-5-1
 電話 03-3561-5549 (出版部直通) (呈・図書目録)

キリスト教の書籍やCD、グッズのご注文は(e-shop 教文館)
<http://shop-kyobunkwan.com/> まで!



本のひろば.com

